

畫的なる春と秋の優劣

武州浦和在西堀

石川幸三郎

四季は各何れとりとり面白からざるはあらねど中にもわけて畫的なるは春と秋となり。春の初めに香の梅のいと清く細き小川の邊に匂へるあたりうぐひすの心ち好びにさへづる様などいみじら愛らしきものなり。

既にして春色駘蕩の候となれば、櫻花はそよ吹く春風に綻び百花漸く開き或は黄菜の青麥の間を彩れるさま或はたんぼ、げんげ、すみれを始め山にも野にも亂咲きたるさまなど、誰か一日の閑を得て終日三脚片手に花を尋ねあるかんと願はざるものぞ。

秋はまた、春の賑やかなるはなけれども一種肅然たる中にまたなんとはなしに面白きものなり、金風颯々たる日深山にふみ入らんか、紅葉は天津乙女の錦を織りなせるが如く、小徑の邊には種々の菌の清き微香を放ち、桔梗、かるかや、おみなへしの落葉の間に、打ち交りて咲きたる、或は白百合の品高う、谷間に打ち開けるさまのなどか人をして繪心を起さしめざる。

春は艶麗にして豊富なり、秋は清廉にして、雅致あり、春の花の月は言はずもがな、春に雲雀、鶯の美音を弄するあれば、秋には鈴虫、松虫の清音を發するあり。春に青々たる麥の茂れるあれば秋には黄波たゞよはして稻の稔るあり。春におぼる夜あらば秋には清澄たる水あり。かく春に優るあれば、秋に勝れたる風景あり。春に勝れたる風景あれば秋には勝れる彩色なり。されば春と秋とに於ける畫的の優劣はなかくに言ひがたかるべ

きか。

炭坑地より

九州 T K 生

T君と僕とは日曜の寫生友達である、今日は工業學校のC先生も一緒に行く事に約束して置いた、M君もC先生が行くならと云つて連れてれに加はる、今日の寫生は常になく賑やかだ。霜の烈しい朝ではあるが風が無いので十時頃は大變暖かくなつた、霜解け道をバチャ／＼と製作工場の裏手を歩く、澄んで居るべき朝の空氣も最早や煙と炭の粉で濁つて居る、洗濯場の異様な建物は黒煤つて屋根には炭の粉が積んで居る、赤煉瓦の大きな煙突からは赤黒い煙が盛んに吐き出されて居る、炭坑鐵道の瀛車はピーピーと長く瀛笛を鳴らして緩く走つて居る、コークス工場の密閉された窯は隙から赤い火焰の舌をベロ／＼と吐き出して居る、高い櫓の下には坑夫や炭を入れたケージが絶えず何百尺かの地獄に入入して居る。僕も一度はこの地獄に入つたことがある、地獄に入る時の心持！それは實に何とも云へぬ程恐ろしい嫌なものだ、ケージに入ると間もなく天地が眞暗になつて足が浮いて踏む處が無くなる、恰度深い井戸に飛び込んだ様な心持だ、目を瞑つてケージの繩をしっかりと握つて居ると落下が益急になつてゴーツと音を立て、下る様になると反對に昇る様な心持がする、下から寒い風が吹き上げて物凄いな事夥しい、坑底に着くと電燈が目映しく輝いて居るので漸く生きた心地がする。